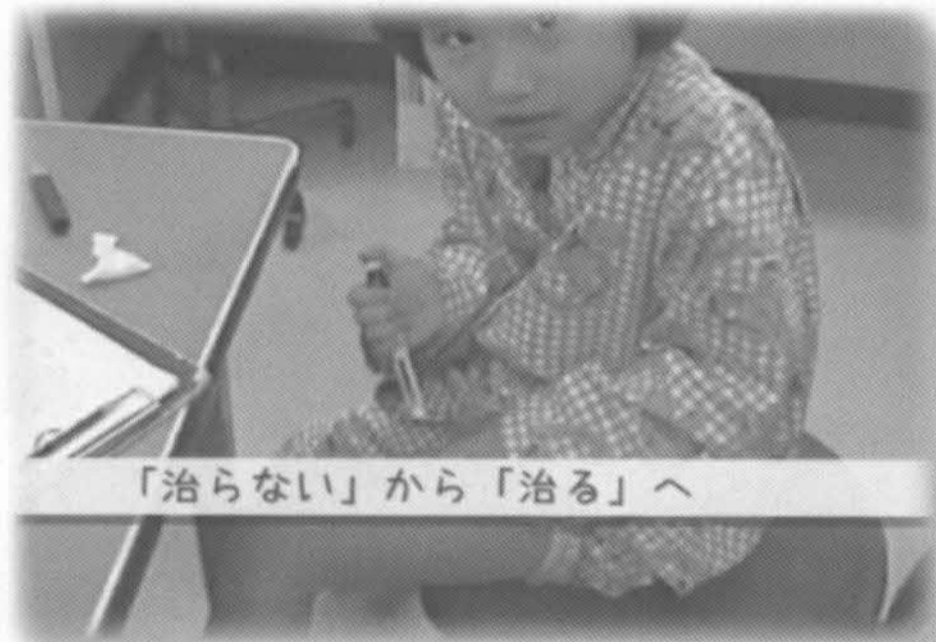


わたしたち日本 IDDM ネットワークの 新たな MISSION 『治らない』から 『治る』へ



こどもたちの手には、
注射器でなく、血糖測定器でなく、
夢と希望をにぎらせたい。
その実現のために、
皆さんの“参加”をお願いします。



日本 IDDM ネットワーク通信 2012 年 1 月号

新年のごあいさつ

理事長 井上 龍夫

新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり昨年の活動を振り返り、また今年にかける私たちの期待感などについて述べてみたいと思います。

忘れもしない昨年3月11日(金)、私たちがこれまでに経験したことのない大地震とそれに続けての津波が東日本の太平洋沿岸を襲いました。この日は翌日に法人化10周年記念の全国シンポジウムを控え、東京でその準備の真っ最中でした。その地震でももちろんシンポジウムは延期しましたが、翌日から通信網の大混乱の中、緊急性と優先性の最も高い被災地からのSOS受信、さらにインスリンメーカーさんあるいは行政との連携でインスリン供給支援など被災地の患者の命を救う活動に向けて全力を傾けました。ご存知のように私たちの組織設立は1995年の阪神・淡路大震災がきっかけになっています。その後16年を経た今度の東日本大震災は災害形態も被害の規模、範囲も全く異なるものでした。あらためてこの疾患に対する災害時対応の重要性とその災害規模や形態による対応の違いを強く認識させられたできごとでした。この地震により文字通り大きく足元を揺るがされた年でしたが、あらためて私たちの原点と今後の活動の方向付けを考える機会になったと思います。

また、去年は私たちの究極のゴールである「根治」に向けた研究推進活動である「1型糖尿病研究基金」の拡大への大きなきっかけとなった年でもありました。これまで研究基金は患者・家族からの寄付金がほとんどでしたが、最近はずいぶんその支援の輪を一般社会へ広げる活動を始めています。そのひとつが「1型糖尿病「治らない」から「治る」—不可能を可能にする—を応援する100人委員会」の設立です。私たちの周りには多くの支援者の方々に100人委員としてお名前を連ねていただき、直接、間接的に「応援団」として支援していただきます。委員にはiPS細胞による再生医学の研究者の山中伸弥教授(京都大学)などの研究者、日本糖尿病学会の門脇孝理事長はじめ学会役員の先生方、さらには1型糖尿病の主人公の長編小説を書かれた小説家の村上龍さんなど様々な分野の方々に加わっていただいております。特に村上龍さんとは直接お会いする機会を持つことができ、ご自身からは「このような作品を出した作家として1型糖尿病の認知活動に積極的に協力したい」とお話いただきましたことは大変心強く感じています。

これら以外にも継続的活動として、カーボカウントとインスリンポンプのセミナー、阪神タイガース岩田投手との連携による子供たちの支援、行政へのロビー活動など着実に進めて来られたと思います。それらの活動の大きな支えと

なっているのは特にイベントなどの開催地域でご協力いただいた多くのボランティアの方々です。この場をお借りしてあらためてお礼を申し上げます。一方で、運営スタッフおよび事務局やなど私たち組織の運営基盤強化の重要性を認識させられた年でもありました。

今年はいこれらの感謝や反省の上に立ち、平成22年度に定めた活動の3つの切り口「救う」、「つなぐ」、「解決」をより明確にして、あらためて優先性を見極めながら個別の事業に取り組みたいと思います。

特に「1型糖尿病お役立ちマニュアル Part3—災害対応編—」の改訂、「1型糖尿病お役立ちマニュアル Part5—患者・家族体験編—」の発行、延期になった全国シンポジウム「2025年1型糖尿病『治らない』から『治る』へ」の開催への再挑戦、さらには米国の1型糖尿病研究基金(JDRF)を訪問し、そこから組織運営と研究支援活動のあり方を学ぶことなどは今年重点的にやりたいことです。そして、ようやく広がりを見せてきた「つなぐ」という支援者との連携・協力活動についても大切にしていきたいと思っています。

本年も多くのみなさまのご支援とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。



1 型糖尿病研究基金についての活動のご紹介

■第1回目(2008年度)の研究支援が新しい展開につながりつつあります。

2008年度の助成テーマ「膵島移植におけるドナー特異的調節性T細胞を用いた免疫寛容誘導」の代表研究者である徳島大学の杉本光司先生はこの研究テーマに関連して2009年4月にペイラー大学メディカル研究所に留学されました。そして一昨年4月に徳島大学病院消化器・移植外科に戻られ、杉本先生の研究もきっかけのひとつとなり、徳島大学に膵島移植の研究施設が整備されつつあります。徳島大学は本年には四国での膵島移植の拠点になる予定です。

■第2回目(2010年度)助成テーマの研究成果

2010年度の3件の研究助成テーマについてそれぞれの代表研究者から研究成果、状況についてお聞きしましたので以下に簡単にご紹介します。これらの研究成果の詳細はWebに掲載する予定です。

①ブタ膵島によるポリビニルアルコール(PVA)マクロカプセル化膵島(MEIs)の研究

研究代表者：
京都大学再生医科学研究所
器官形成応用分野
角 昭一郎 准教授

本研究はブタなどの膵島を用いた膵島移植(このような異種動物からの膵島を用いる治療をバイオ人工膵島と呼びます)の実用化研究です。具体的には移植後の取り出しや交換が容易で、凍結状態での保存や輸送、品質管理も可能なマクロカプセル化したブタ膵島の作製方法を確立して、免疫抑制薬

やドナー不足の懸念がない新しい糖尿病治療の実現を目指されています。

今回の研究はブタの膵島を樹脂(ポリビニルアルコールゲル)でマクロカプセル化することを前提に保存液や輸送法、またカプセル化後の移植手技、細菌汚染など安全性など基本的な検討が行われました。その結果、輸送時の保存液の選択やマクロカプセル化での取り扱いの注意点などが明らかになり、今後の研究課題が抽出されました。またマウスを使って腹腔内への移植実験を行い、一時的ですが600mg/dL以上の血糖値が222~419mg/dLまで下がるなどの効果は見られましたが、残念ながら長期的効果の確認には至っていません。

今後、今回の経験を元に抽出された課題の解決に取り組み、バイオ人工膵島の我国独自の技術として実用化されることを期待しています。

②ヒト膵細胞を用いた血管構造を有する膵島創出法に関する臨床応用技術の開発

研究代表者：
横浜市立大学大学院
臓器再生医学
谷口 英樹 教授

本研究は膵島移植の課題の一つである移植用臓器の絶対的不足を克服し、さらに従来移植される細胞が血管系をもっていないために生ずる移植効率低下の問題解決をねらい、革新的なヒト膵島の再生医療技術の開発に取り組まれています。今回の研究では、特殊な構造をもつ模擬的に微小重力環境を作る装置を利用した新しい三次元培養法を用いて、膵島細胞(β細胞)から実際の膵島に近い三次元構造体を大量に創り上げることに成功されました。さらに、独自

に開発したヒト血管再構成技術を用いることで、その構造体の中にヒト血管構造を導入することにも成功されました。

また本研究で開発した新しい方法により、マウスを用いて、培養された膵島様構造体に早期に血流が再開して、生着することが確認され、実際にインスリン分泌を行う機能的な膵島組織が効率よく再構築されることも明らかになりました。

今後、本研究が進展し、患者自身のiPS細胞などによるヒトの膵島細胞を材料として血管化されたヒトの膵島組織を効率よく作成するための医療技術にまで到達することで、一日でも早く糖尿病に対する革新的な再生医療が実現されることを期待しています。

③体内での膵β細胞再生による1型糖尿病に対する治療法の開発

研究代表者：
東北大学大学院
医学系研究科代謝疾患医学コアセンター
片桐 秀樹 センター長

本研究は当グループが発見したヒトの体に備わった糖尿病予防機構として、肝-脳-膵の臓器間神経ネットワークを1型糖尿病に活用して、体内において膵β細胞の再生につなげることを目指した研究です。実際に膵β細胞が減っている1型糖尿病モデルマウスで、この神経ネットワークを刺激したところ、膵β細胞の再生が起こり、長期にわたり血糖値の改善が認められました。

今回の研究ではこのシステムの出発点となる肝臓から、どのような分子シグナルが発せられるのかを明らかにするため、このシステムが働いているときに肝臓から分泌されている分子の探索が試みられました。候補分子の一つと考え

られたIL-6という分子は、膵β細胞に働いてインスリン分泌を増やす作用までは確認されましたが、膵β細胞自体を増殖させることまでは見られませんでした。現在、このほかの候補分子についても研究が進められており、より詳細な分子機構を解明することができる、その分子自体が、膵β細胞再生治療薬のターゲットとなる可能性があります。

この研究が進み、最終的には、体に備わったシステム、自分自身の細胞により、あるべき場所（膵

臓）で膵β細胞が再生するという全く新しい観点からの糖尿病治療として、このシステムを刺激する医薬品の開発へと応用されることを期待しています。

■岩田投手からの2011年シーズンの9勝分(90万円)の寄付

皆さんご存知の阪神タイガースの岩田稔投手は今シーズン、怪我からの1年ぶりの復帰を果たし、9勝をあげました。2009年から1勝につき10万円を「1型糖尿病研究基金」に寄付していただいております。今回は90万円の寄付になりました。年末の12月3日(土)に甲子園球場で、井上理事長出席のもと寄付金の贈呈セレモニーが多くメディアの前で行われました(写真)。岩田投手の「二けた勝利に届かず悔しい。来



シーズンは10勝以上あげたい。」というコメントはとても頼もしいものでした。10勝は1件(100万円)の研究助成に相当する額でもあり、来季も大いに頑張ってもらいたいと思います。この場を借りて岩田投手にお礼を申し上げます。

■研究基金応援団「100人委員会」の活動をスタート

理事長の新年のあいさつでも触れていますが、1型糖尿病研究基金の認知と支援拡大のために応援団としての『1型糖尿病「治らない」から「治る」－“不可能を可能にする”－を応援する100人委員会』を設立しました。この委員会を通じて、広く社会に1型糖尿病根治に向けた研究支援を呼びかけていきたいと思っています。これからも皆さんのご協力をよろしくお願いたします。



糖尿病ケアの世界的なリーディングカンパニー

ノボ ノルディスクは、デンマークに本社を置き、世界74カ国に30,000人以上の従業員を擁し約180カ国で製品を販売する世界的なヘルスケア企業です。

糖尿病ケアにおいては、「Changing Diabetes®－糖尿病を変える」を掲げ、糖尿病克服に向けての研究開発はもちろんのこと、さまざまな分野で社会活動を行っています。また、成長ホルモン治療や血友病の領域においてもリーディングカンパニーです。

ノボ ノルディスク ファーマ株式会社

〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-1-1 明治安田生命ビル
電話(03)6266-1000(代表) FAX(03)6266-1800
www.novonordisk.co.jp



研究者訪問って、 お☆も☆し☆ろ☆い

1型糖尿病の根治に繋がる研究を行っている先生の研究者訪問を昨年からはじめ、これまでに2回行うことができました。1回目は東京大学医科学研究所の中内先生と小林研究員に、「マウスの体内でラットの膵臓をつくる」研究について、2回目は東京大学生産技術研究所の竹内先生と興津先生に、「マウスの耳にファイバーを埋め込み、光で血糖値を計測する」研究について伺いました。研究の内容については日本 IDDM ネットワークの Web (1型糖尿病研究基金→先端医療の関連情報→患者が行く、研究室訪問) に掲載していますので、まだご覧になっていない方は是非お読みになってください。

研究の内容がちょっと難しいという方は、研究者と患者の対話の部分からお読みになるといいかもしれません (中内先生の第3話、竹内先生の第2話)。研究という土俵では、研究者と患者は、いわば先生と生徒で、私たち患者はただただ感心して聞くばかりです。しかし、話が1型糖尿病のこととなれば、私たちは現状を一番よく知る専門家です。実情から始まって、今後あってほしい姿について、一緒に話し合うことができます。2回目にお話を伺った竹内先生はモノづくりの専門家、興津先生は膵島移植を行われているお医者さんです。そこに百戦錬磨の1型糖尿病患者4名が加わり、話は盛り上がりました。

患者の私たちからは、「マウスは耳が光るけど、じゃ、人の場合はどうするの?」と声が上がります。研究者の先生からは、「埋め込むことに抵抗はない?」とか、「現状のセンサーのどういうところが不満?」などと、質問が飛んできました。

埋め込む位置に対しては、こんな答えが返ってきました。「マウスの場合には本当に皮膚が薄いので、耳が適当でしたが、人間の場合にはどうなのかを考え直さなければなりません。

腕時計型がいいのか、爪の方がいいのか、あるいは指輪型など。さらに言うと、本当に皮膚を介した計測がいいのかということもあります。小さくして光学の計測器まで全部埋め込んでしまって、電波で飛ばす方法も考えられ、そうなると埋め込み部位はどこでもいいわけですよ。現在の私たちのセンサーはデモンストレーションで、実際に人間に

がいいと考える人。1型糖尿病が『治らない』病気から、『治る』病気になるまでにはまだ時間がかかることを考えると、そのゴールに到達するまで、私たちはこうした一つ一つの課題を自分自身で選択していくことが必要になるでしょう。

センサーへの要望については、患者さんから声が上がります。「血糖値が同じ100でも、上がっている時の100なのか、水平で移行している時の100なのかによって、次の行動が変わってきます。次の行動は患者が変えることができるので、今の血糖の傾向を知りたいです。」そして、現状を知っていただくために、血糖測定を実演しました (おまけでイン



東京大学
生産技術研究所
竹内昌治
許允禎
興津輝
技術研究組合
BEANS研究所
柴田秀彬
川西徹朗

耳が光って血糖値をお知らせ。
~4ヶ月以上長期埋め込み計測に成功!~

埋め込むとなると、どこが適当なのかはまだまだ検討しなければならないでしょう。」

埋め込むということに関しては、竹内先生からこんな発言がありました。「埋め込み型センサー自体は、まだ社会に受け入れられないと思うんですよ。なんか埋め込むというのは抵抗がある。でもそういったデモンストレーションを僕らがすることによって、社会の反応を探り、その時代の価値観にあったセンサーを開発できればよいなと思っています。」

さて、皆さんはどう思われるでしょうか。研究室にお邪魔した患者の意見も、それぞれでした。埋め込まないものが開発されるならその方がいいとする人、埋め込むことによってQOLが良くなるならその方

スリン注射も)。お医者さんである興津先生はよくご存知でしたが、モノづくりの専門家の竹内先生は、初めて患者が血糖を測定するところをご覧になりました。そして一言。「いやあ、本当に現場を知ることができました。」

1型糖尿病現場の専門家として参加する、研究者訪問は **お☆も☆し☆ろ☆い**。



世界の舞台で活躍する 2人のアスリート

皆さんはもう日本IDDMネットワークのWeb（暮らしに役立つ生活情報→日常生活→活躍する患者たち）でお二人の対談を読んでいただきましたか。ここでは、もう少し突っ込んだ患者ならではのお話をお届けします。

チャーリー・キンボール×大村詠一

（カーレーサー：インディカー・シリーズに参戦中）

（エアロビック日本代表）



■大村さんはインスリンポンプをつけながら競技をすることが難しいので注射と伺っていますが、キンボールさんはインスリンポンプですか。

キンボール：いえ、ポンプではなくインスリン注射です。レースのときに着用しているスーツ、ヘルメット、手袋は耐火のため3層できており、とても厚いのです。そのため、医師からインスリンの温度が上がるのが気になると言われていますし、また、コックピットは非常に狭いため、ポンプは使用していません。

■キンボールさんは持続血糖モニターをつけているのですか。

キンボール：車に乗る前から持続血糖モニターを装着して、そのトレンドを見て安定した血糖値でレースに臨めるようにしています。通常お腹につけるセンサーを私は腕の後ろの方に装着し、モニターはハンドル近くにつけてレース中に血糖値を確認しています。

■血糖が下がる自覚症状はありますか。

キンボール：低くなると自覚症状が出てきます。ハンドルをしっかり握るのが難しくなります。高くなると、

目の焦点を合わせるのが難しくなると感じます。

大村：私は血糖が低くなると目の焦点が合わなくなり、高くなると筋肉が張る感じがします。

■発症したとき、そして現在、糖尿病をどう思っていますか。

キンボール：診断を受けた時すでにカーレースというやるべきことがあったので、やってきたことをやめるという選択肢はありませんでした。糖尿病では関係者も含め、よいコミュニティ、グループができています。私自身も糖尿病になってから世界中の多くの人からサポートを受けました。それらのサポートが私に自信を回復させ、希望を実現するための後押しになってくれたと思います。

今では私にとって糖尿病はすっかり日常の一部となり、まだ発症していなかった16歳の誕生日に、ケーキを食べる前に血糖チェックをしたような気になっています。そのくらい当たり前のことになりました。そして糖尿病になったおかげで、よりよいアスリート、よりよいドライバーになったと思っています。今まで体験してきたことは病気にならなくてはできなかったことであり、

いろいろな人との出会いもなかったと思います。チャンスが開けたと言えるでしょう。診断された日にはレースができるか不安でしたが、今になってみると特別な日だったと受け止めています。

大村：私は発症が幼かったために、健康な状態で競技をするという感覚がありません。逆に血糖管理が必要だから、これならベストパフォーマンスできる値だと判断することができます。もし病気にならなかつたら、きっとずぼらな生活をしていただのではないかなと思います。一流と呼ばれる人は、自分の生活や体調の管理、感情のコントロールが必要です。私の場合、病気になったおかげで、食事や血糖の管理など、自己管理をすることができるようになり、結果として日本代表になることもできました。さらに、いろいろな人との出会いもあり、様々な考えを知ることができました。いつも言うことですが、糖尿病とエアロビックは私の2つの個性で、これからも自分の中で大切なものとして生きていきたいと思っています。

※ノボ ノルディスク ファーマ(株)本社で行われた対談を、取材させていただきました。



2011年の振り返りと2012年に向けて

事務局長 岩永 幸三

○患者・家族会への助成金交付

つばみの会愛知・岐阜と熊本つばみの会に交付しました。ちなみに熊本つばみの会では約500名規模のシンポジウム。テーマもCGMや人工膵島等、興味深いです。2012年1月29日(日)、くまもと森都心プラザで開催されます。九州新幹線が開通した熊本駅前の新しい複合ビルです。日本IDDMネットワークのシンポジウムよりも大規模!

他の会員患者・家族会からの申請もまだまだお待ちしております。

○患者・家族会設立助成金の交付

未だ実績は無いです。新たに設立するって相当なパワーも必要です。随時受け付けていますので遠慮無く事務局にご相談ください。

○20歳以上の患者支援策実現に向けての政策提言

2011年11月14日に開催された国の第17回難病対策委員会で、「身体障害者福祉法を改正し、1型糖尿病を身体障害者福祉法の内部障害として位置づけていただきたい」旨の資料を委員に配布しました。続けて12月9日には小宮山厚生労働大臣に対し要望書を提出しました。

今年も引き続き国会議員や国に対し、ロビー活動を展開していきます。

この政策の実現には、データや体験の提示、合理的な基準の提案、費用対効果の検証等、かなりの作業が伴います。こうした業務に強い方の“参加”をお待ちしています。

○配偶者控除制度の存続に向けての政策提言

政府の税制抜本改革では廃止の方向で検討されています。多額の医療費負担を抱える患者・家族にとってはたいへん困ります。存続又は廃止に代わる政策の実現に向けてJPA(日本難病・疾病団体協議会)とともにロビー活動を展開して行きます。

○介護職員によるインスリン注射が可能となるための政策提言

2011年11月14日に開催された国の第17回難病対策委員会で、「介護職員

によるインスリン注射が可能となるよう法整備を行っていただきたい」旨の資料を委員に配布しました。

今年も引き続き国会議員や国に対し、ロビー活動を展開していきます。

この政策の実現のために、体験を提示し、論理的に国と議論できる方の“参加”をお待ちしています。

○学校、幼稚園等での説明用

パンフレットの配布

東京学芸大学と協働で作成した学校や幼稚園・保育園の先生に説明するためのパンフレットを配布しています。詳しくは当法人のWEBをご覧ください。

○注射器、血糖測定器等を入れるキティちゃんポーチ等の配布

ロシュ・ダイアグノスティクス株式会社様が企画し、株式会社サンリオ様のご協力で製作された注射器や血糖測定器等が収納できるポーチを、全国の1型糖尿病患者で希望される方々にプレゼントしています。詳しくは当法人のWEBをご覧ください。

○1型糖尿病[IDDM]レポート(IDDM白書)2012の作成

2011年3月に日本初の“1型糖尿病[IDDM]白書”を創刊しました。重要性、緊急性のあるテーマ、解決すべきテーマに焦点をあて、その分析と解決策を提案しています。全文を当法人のWEBに掲載しています。今年も5月の発行を目指しています。

○インスリンポンプとカーボカウントのセミナー開催

2011年は10回開催しました。ほとんどの会場で満席状態です。医療者の方々の参加が半分以上を占めており、患者にとってもたいへん有意義で好評です。

また、当日は多くのボランティアの皆さんに“参加”いただいています。様々な関係者の皆様のご協力でのセミナーは成り立っています。感謝申し上げます。

今年も岡山、名古屋、東京での開催が決定していますので、ぜひご出席く

ださい。このセミナーで“体験”することが重要です。

○1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアルPart1~4の配布

昨年もたくさんのご注文をいただきました。当法人のWEBに申し込みフォームも新たに設けましたのでご利用ください。

○1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアルPart5の発行

リクエストの多かった“1型糖尿病[IDDM]お役立ちマニュアルPart5-患者・家族の体験編-”の作成に着手しました。内容について、まず東京と大阪で意見交換を行います。その後、WEBでの情報収集も検討しています。

この本は患者や家族の皆さんの協力がなくては作成できませんので、“参加”をお待ちしております。

○患者・家族会訪問調査

昨年は東日本大震災で被災された地域の患者・家族会であるけやきの会(宮城県)とたんぼの会(福島県)におじゃましました。

両会とも会長さんが全ての会員に連絡をとって安否確認等の対応をされていました。地域患者・家族会の役割の重要性を再認識しました。

○祖父母向けマニュアルの作成

ご自身が患者の祖母であり、当法人で相談業務に携わっていただいている陶山えつ子さんのご協力で作成しました。全文を当法人のWEBにも掲載しています。

○JDRF(米国1型糖尿病研究基金)調査

昨年はJDRFがどんな活動をしているのか翻訳作業を行いました。いよいよ今年には井上理事長と大村詠一理事が現地に出向きます。

JDRFの目指す「糖尿病の根治とその合併症の治療のための研究を支援する」ことを学び日本での私たちの活動に活かします。

なお、この事業はAJOSC(全日本社会貢献団体機構)様 <http://ajosc.org/>からの助成金により実施します。

○ノーモア注射募金活動

いよいよ今年から「糖尿病の根治」に向けて“ノーモア注射募金”活動を開始します。3月10日(土)のスタートに向けて準備を進めています。マンスリーサポーター(毎月1口2000円の寄付)を募集し、根治を目指す研究に助成します。

○全国シンポジウム

東日本大震災により延期していましたが、3月10日(土)11日(日)の両日、“2025年1型糖尿病「治らない」から「治る」へ”をテーマに東京スカイツリーのもとで開催します。ボランティアでのご参加もお待ちしております。

○日本糖尿病学会との連携

昨年、学会の門脇理事長さんと直接お話しすることができ、これから糖尿病学会、医療者と患者・家族が一層連携してこの1型糖尿病の将来に向けて協力することを確認しました。これを機会に社会からの理解、認知等が進むことを期待しています。

○プロスポーツとの連携による

1型糖尿病の啓発

昨年はプロバスケットボールチームの富山グラウジーズさんのご協力でホームゲームで1型糖尿病や同研究基金をアピールいただきました。

また、プロ野球阪神タイガースの岩田稔投手には甲子園球場での試合に患者を招待していただいたり、1勝当たり10万円の研究基金へのご寄付を頂戴しました。

おかげで、1型糖尿病の認知が深まっています！

○マスコミとの連携

世界糖尿病デーにあわせて、フジテレビの「FNNスピーク」で「知られざる小児の糖尿病」という報道に協力しました。

○電話やメールによる相談

電話は患者の母でもあり祖母でもある陶山さんと患者である飯田さんに対応してもらっています。メールは理事長の井上さんと岩永で対応しています。全ての問い合わせに対応すべく頑張っています。勿論、できないことは「できない」と回答しています。

○ホームページによる情報発信

今年何とかリニューアルにこぎつけましたが、未だに岩永一人で作業を続けています。プロボノワーカー(職業上の知識やスキルを活かして貢献するボランティア)がいてくれたらとつくづく思っています。

○老人福祉施設関係者との情報交換

介護職員によるインスリン注射が早期に可能となるため、関係団体との話し合いを継続したいのですが人手が足りません。早く注射が可能となるよう、関東圏でこの業務に携っていただける方の“参加”をお待ちしています。

○会報の発行

いよいよ年2回が限界に。情報集めから編集までしていただける方の“参加”をお待ちしています。

○東日本大震災への対応

2011年3月11日の震災発生に伴い、翌日の全国シンポジウムを中止し、12日から被災地の患者・家族に向けた情報発信と寄せられる要請に対応しました。阪神・淡路大震災時の被災患者である森地さんを中心に大村詠一理事(エアロビック日本代表)が頑張ってくれました。

寄付活動も4月末からと遅れましたが、全国から135件771,176円ものご寄付を頂戴しました。心から感謝申し上げます。

当法人にとっては初の支援活動であり認知度も低かったと思いますが、宮城、福島といった地元患者会の会長さんの尽力もあり、SOSは予想以上に少なかったです。

今回の震災をふまえて、森地さんと山本康史理事(みえ防災市民会議議長)とともに東海・東南海地震等に備えて、患者の災害対応マニュアルの改訂に着手しました。今年上半期の完成を目指しています。

○1型糖尿病の研究基金

1型糖尿病の根治に向けて研究を重ねておられる研究者や研究団体に対し研究費の助成を行うことにより、治療法の確立を図るのがこの基金です。

昨年1月末には、NPO、製薬企業、プロスポーツ、最先端の研究者の方々11人が発起人となり、『1型糖尿病「治らない」から「治る」- “不可能を可

能にする”-を応援する100人委員会』を立ち上げ、3月12日にスタートする予定でしたが、東日本大震災で延期となりました。

今年3月10日の全国シンポジウムで100人委員の方々をご紹介すべく準備を進めています。

インターネットの保険(自動車保険、医療保険)「DOZO」、病気等の情報を伝えるアクセサリ「MEDIC INFO」、飲料自動販売機(コココーラさん、伊藤園さん)等による研究基金への寄付付き商品も進行中です。

これだけ多彩な応援団が揃いました。私たち患者・家族は多くの方々に支えられています。私たちも行動しましょう！

そして、いよいよ第4回目の研究費助成(総額200万円)の公募を開始します。

これまでの研究成果ともども、当法人のホームページ、行事等で公開して参ります。

糖尿病の根治を目指して、皆さん一緒に頑張りましょう！！

○認定NPO法人を目指して

今年は、寄付をされた個人の方に税額控除や所得控除、法人の方には損金算入限度額が拡大される認定NPO法人になんとしてもなりたいと思います。

認定の条件をクリアするために、多くの方々に昨年のイベントや国会請願募金等で“3000円募金”にご協力いただきました。

日本IDDMネットワークの活動に共感され、寄付をいただくみなさまに事務局として今年中に認定NPO法人になることをお約束せねばと。

○事務局運営

井上理事長とペアを組んでもう12年近くになります。二人とも日中は別の仕事を持ちながらの活動なので自ずと限界があります。あまりの業務のハードさ等でやめていく役職員もいます。

定型業務の外部委託を一層すすめ、業務改善とコスト削減を図ります。

また、昨年は約30名のボランティアの方々に関わってもらった反面、やめて行かれた方もいます。日本IDDMネットワークには、井上さん、岩永とボランティアを繋ぐコーディネーターとなる人材が望まれています。



役員 の 抱 負

理事 大村 詠一
(エアロビック日本代表)

認知の低さ — 少しずつ1型糖尿病も世間に知られてきたかと思っていたところに痛感させられてしまった2011年となりました。

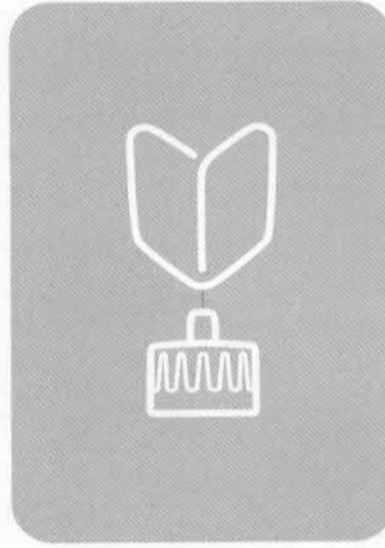
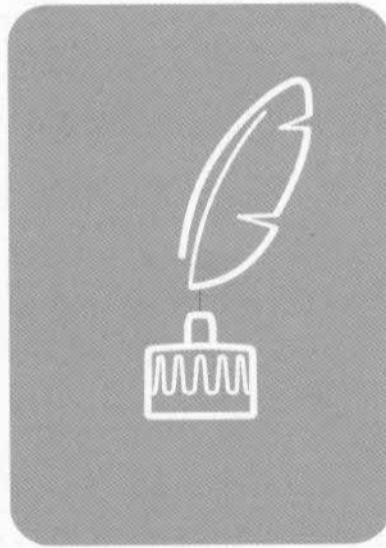
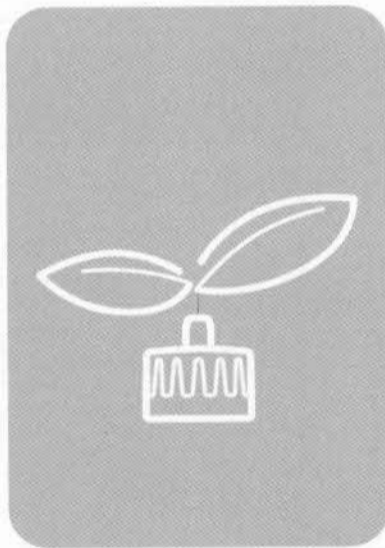
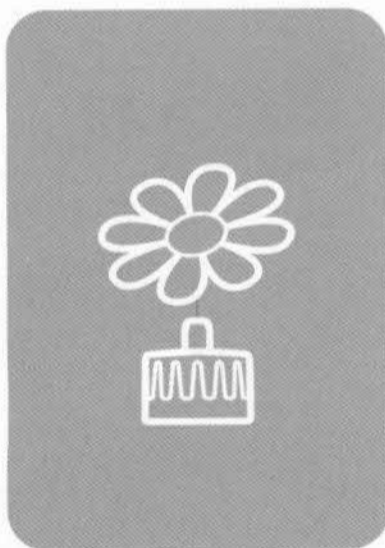
◎東日本大震災を通して

3月11日の東日本大震災の発生に伴い、被災された患者さんはインスリンの入手等で大変な苦勞を強いられました。そこで、当NPO法人は支援を行うべく、ホームページやTwitter、FacebookなどのWebサービスを活用して問い合わせを受け付けました。しかしながら当NPOのことを知っている方は僅かで、問い合わせ件数も僅かでした。また、阪神・淡路大震災で患者さんがインスリンの入手等に大変な苦勞を強い

れた経験を活かして作成された「1型糖尿病 [IDDM] お役立ちマニュアル Part3—災害対応編—」の一部公開も行いましたが、どれだけの人に活用してもらえたかは分かりません。震災からだいぶ経って、Twitterには「こんな活動をしていたNPOがあったとは知らなかった」といった意見も寄せられました。もっと活動が知られていれば、もっと多くの人を手助けできたかもしれない。そう思うと、凄く残念で仕方ありませんでした。Web広報担当として、会員ではない患者さんの意見も耳にする機会が増えたこともあるのかもしれませんが、理事になったばかりの2010年以上に、私たちの活動が知られていないことへの悔しさを強く感じました。

◎講演会にて

私は現在、1型糖尿病の啓発のため、小中学校や高等学校などの教育機関を中心に講演会を行っています。講演会では、自分が1型糖尿病を発症してから病気を受け入れるまでに最も辛かったことの1つ＝「1型糖尿病に対する認知の低さからくる世間の偏見」を訴え、1型糖尿病と2型糖尿病の違いなどをお話ししてきました。その甲斐もあり、講演を始めた大学時代には、1型糖尿病について知っている方は100人に0～1人程度だったものが、最近では3～5人程度、多いところでは10人程度にまで増えてきました。ところが、病気の名称やインスリン注射を必要とすることは知っていて



時代は極小[※]4mmへ



長年に渡り、患者さんの負担を減らす注射針の研究を重ねてきたBDが、より痛みをやわらげ、簡単かつ確実なインスリン投与を可能にしていきます。

※ 2011年12月現在、日本国内で販売されているペン型注入器用注射針の中では最も短い(4mm) ディスポーズブル注射針です。

GOOD DESIGN 2010

日本BDは、創立40周年を迎えました。 | www.bd.com/jp/diabetes/

日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 本社:〒107-0052 東京都港区赤坂4-15-1 赤坂ガーデンシティ
※BD、BDロゴはBecton, Dickinson and Companyが保有します。©2011 BD



Helping all people
live healthy lives

も、まだ根治に繋がる治療法がないことや、病気への理解がないために様々な偏見に苦しんでいることなど、私たち患者が悩んでいること＝当NPOが伝えたい、救いたいとしていることは、まだまだ知られていないことがわかりました。

11月14日に熊本でも熊本城と天草キリシタン館がブルーにライトアップされましたが、講演会で世界糖尿病デーが制定されていることなどを知っている方は皆無に等しい状況でした。そんな現状を見て、どこか関係者だけで話が終わっているのではないか？もっと一般の方を巻き込んでいかなくは一生理解を得られないのではないか？そんな思いが強まりました。

ど私たちは「救う・つなぐ・解決」の3つのステージでより一層活動していきます。そのとき、活動の分野を広げていくことと同様に、活動を知っている人を増やしていくこと、そして、活動に“共感”し一緒に活動する仲間を増やしていくことにも力を入れていきます。私は、講演活動やエアロビックというスポーツを通して1型糖尿病を世間に伝えること、Webサービスなどを活用して世間の意見を聞き、思いを伝えるだけでなく、同志を募ることも意識的に行っていきます。皆さんも是非ご協力宜しくお願い致します。

是非ご覧いただき、世間の1型糖尿病への更なる認知へ向けてアイデアやアドバイスをいただけたらと思っております。ご協力宜しくお願い致します。

Twitter :

http://twitter.com/iddm_network

Facebook :

<http://ja-jp.facebook.com/jiddm.net>



【今年の抱負】

1型糖尿病研究基金をはじめ、交流会やセミナーの開催、政策提言な

* Twitter と Facebook

日本IDDMネットワークのホームページの更新やセミナー情報、1型糖尿病に関する報道情報などをTwitterやFacebookというWebサービスを活用して私がお知らせしてい

糖尿病のタイプを問いません。糖尿病・歯周病でもご加入いただけます

おくちとからだの保険
糖尿病・歯周病 医療保険「ペリオ DM80」

歯周病は血糖コントロールを阻害し糖尿病を悪化させる要因の一つ！



★入退院以外のインスリンポンプ装着・取替などの通院、歯周病治療の通院も保障する糖尿病の方の保険です！ ExcelAid

おくちの歯周病の治療通院や組織再生・インプラント手術、からだの糖尿病(合併症含む)の治療通院や合併症併発による長期入院、歯周病・糖尿病・糖尿病以外の病気・ケガの入院、手術、通院を保障します！



新登場	ペリオ DM80
入院給付金	●5,000円×入院日数(1入院:60日限度) ●合併症併発:新たな入院 60日限度適用
手術給付金	●入院中手術:5万円・入院外手術:2.5万円 ●歯周病手術 25,000円×2回限度
通院給付金	●退院後通院(1入院) 2,000円×10日限度 ●糖尿病治療通院 2,000円×10日限度 ●歯周病治療通院 2,000円×10日限度
給付金総額	1保険期間(毎年) 800,000円限度

★お医者に行こう! 悪化予防の治療通院 毎年最高 4万円給付

- 加入年齢:0歳3カ月～満89歳
- 診査: 告知(無診査)
- 保険期間:1年の更新型

月払保険料(例)

年齢	男性	女性
10歳	1,931円	1,635円
20歳	2,455円	1,918円
30歳	3,138円	2,204円

< ウェブで社会貢献 >
お客様が選択された寄付先へエクセルエイドが寄付します！

1型糖尿病研究基金など

●ウェブ申込
エクセルエイド 検索
●資料請求
Tel. 03-3538-0025
(平日 9:00-17:00)

初年度契約に限り、ケガを除き、60日の免責期間があります。月払保険料は加入・更新年齢により変わります。この広告は商品の概要を説明しています。必ず、「パンフ」・「約款」・「重説」などをご覧ください。E11-0430-AD1

エクセルエイド少額短期保険株式会社 関東財務局長(少額短期保険)第3号
〒104-0061東京都中央区銀座1-19-14 URL:<http://www.excelaid.co.jp>

患者・家族会の取り組み

日本IDDMネットワークでは、地域患者・家族会の活性化のために助成金を交付しています。今回は、WA!の会（岡山1型糖尿病の会）とつぼみの会愛知・岐阜の取り組みを紹介します。

WA!の会の「WA!の会10周年のつどい」

日時:2010年11月13日(土) 場所:岡山駅前ミヨシノ 参加者数:35人

18歳以上の小児期発症患者、成人発症患者、患者家族や医療関係者、皆が一つになっていつも活動しています。隔月開催している約2時間の定例会が会員のオアシスとなるよう、一見雑談のようにも見える有意義なコミュニケーションと、テーマを絞った勉強会の両方に力を入れて活動してきました。設立10周年の節目の年を迎え、今までの会の歴史や活動を振り返るとともに、今後の発展を目指して「WA!の会10周年のつどい」を開催しました。第1部では、設立当初の顧問や事務局の先生方が遠くから駆けつけ、設立当初の思い出話、活動を支えてくださった頃の気持ちなど熱く語ってくださいました。引き続き、食事・歓談の際には「WA!の会10年間のあゆみ」と題し、思い出の映像を盛り込んだミュージックビデオを上映し、過ぎ去った10年間に思いを馳せ、懐かしみました。

第2部では、ゲストの陶山克洋(1型糖尿病患者)さんからの「1型糖尿病と私～1型糖尿病の娘と生きる当事者からのメッセージ～」を聴き、自ら力が湧いてくるようなメッセージをたくさん吸収できました。本当にありがとうございました。その後、テーマに分かれての交流会(食事、コントロール、メンタルなど)、記念写真で終了しました。

今回の助成金は、記念品のクリアファイル作成代金の一部に使わせていただき、会員皆の思い出の品となりました。また、この記念イベントを盛会に終わったことで、会員の団結がますます深まり、今後も楽しみです。

つぼみの会 愛知・岐阜の「クリスマス会・相談会」

日時:2010年12月23日(祝) 場所:ウインクあいち(名古屋市) 参加者数:117名

一日かけてこの行事を行いました。午前の部は、みんなで楽しめるクリスマス会を開催しました。この地域のゆるキャラ「ねぎっちょ」(岐阜県岐南町)も登場し、ねぎっちょ体操やクイズ、ビンゴゲームで盛り上がりました。お昼ごはんもみんなで食べ、自由に歓談して会員同士の交流を深めました。

午後の部は、医療の相談会を当会特別会員である糖尿病専門2名の先生のお力を借りて行いました。加えて、生活や学校などに関する問題や困りごとなどについて、役員による相談会も行いました。この助成金による予算措置のおかげで、会場で賃借する機材を充実させることができ、行事の進行がスムーズにいきました。当日のアンケートによれば、概ねこの行事内容は好評でした。

行事の内容を考える際にいつも思うのですが、ただ集客が多ければ良い行事というのではないはずで、会員からの様々なニーズも取り入れて、参加して収穫があったと感じられるものを今後も目指して行いたいと思います。

また、行事開催の場所が大きい都市(当会では名古屋市)になりがちで、遠方からは参加しにくい状況になってしまっています。これは解決したい課題と捉えています。現在のところ、時々ですが岐阜県で行事を開催しています。

日本IDDMネットワークの頼もしい助っ人のご紹介！

中村 嘉克さん（佐賀県）

事務局長の役人人生スタート時からのおつきあい。岩永の仕事のやり方、性格も熟知。経営する会社の2階を改装し、岩永に作業場所を提供。こちらの会社のおかげで日本IDDMネットワークの事務局運営は成り立っています。

関口 恒明さん（東京都）

予算規模の拡大に伴い素人では難しくなってきた、岩永が途方に暮れていたときに登場された経理のプロ。関わって以来、1円たりとも間違いのない作業は、さすが経理経験40数年、大ベテランです。井上さん（理事長）は時々注意されていたような（笑）

江頭 清子さん（佐賀県）

約1年前から日本IDDMネットワークの窓口業務をやっていただいています。糖尿病のことを詳しくは知らないけれど誠実に対応していただいています。三つ子の優しいお母さんです。岩永の厳しい指導にもめげず奮闘中！

飯田 智恵さん（京都府）

日本IDDMネットワークの相談電話を常時受けてくれる人がいなくなった時に救世主のごとく登場。患者でもあり頼りになるお母さんでもあります。

大阪杉の子会の皆さん

東日本大震災の対応で他の業務がストップしたときに多くの方々が名乗り出てくださいました。電話相談対応と阪神タイガースの岩田稔投手の患者招待試合の手配をやっていただきました。

西岡 明樂さん（佐賀県）

カーボカウントとインスリンポンプのセミナーをそつなくこなしていただいています。岩永の厳しい一言にも即対応いただく、まさにプロフェッショナルです。

日本IDDMネットワークはこうした方々の支えで2011年を乗り越えることができました。

2012年もよろしくお願い申し上げます！

今年、理事長は60歳、事務局長は50歳、その次の大村詠一理事は20代、この間の人材がいてくれると助かるな～

Lilly

一般の方・患者様向け

日本イーライリリー医薬情報問合せ窓口 リリーアンサーズ

Lilly Answers

リリーの自己注射用注入器のご使用に関する
お問合せなどがございましたら、お気軽にお電話ください。

0120-245-970 ※1 ※1 通話料は無料です。携帯電話、PHSからもご利用いただけます。
078-242-3499 ※2 ※2 フリーダイヤルでの接続が出来ない場合、このお電話番号にお掛けください。尚、通話料はお客様負担となります。

0:00 8:45 22:00 24:00

月	音声ガイダンスによる対応	オペレーターによる対応	音声ガイダンスによる対応
火			
水			
木	音声ガイダンスによる対応		
金			
土			
日	製品に関するお問合せも受け付けております。月曜日から金曜日 8:45～17:30		

リリーの サポートプログラム

必要なとき、
必要な情報を。



お電話でも…

Webでも…



一般の方・患者様向け

糖尿病情報提供サイト

Diabetes.co.jp

www.diabetes.co.jp

糖尿病情報提供サイトDiabetes.co.jpは
患者さんご家族を応援する情報を
多数ご用意しております。

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086 神戸市中央区磯上通7丁目1番5号

INS-A026 (R3)
2008年8月作成

イベント・セミナーの情報

詳しくは Web でご覧ください。 [日本IDDMネットワーク](#) [検索](#)

■日本IDDMネットワーク法人化10周年・1型糖尿病研究基金設立5周年記念シンポジウム■

ー 1型糖尿病 2025年“治らない”から“治る”へー

2012年3月10日(土)

■関連行事■ 3月11日(日)

- 持続血糖モニター(CGM)がもたらす糖尿病治療の新たな時代
- 患者・家族座談会
～1型糖尿病(IDDM)お役立ちマニュアル Part5(患者・家族体験編)作成に向けてのランチセッション ほか



■インスリンポンプとカーボカウントのセミナー■

- 岡山市 1月29日(日)10時30分～16時30分 きらめきプラザ
- 名古屋市 2月19日(日)10時30分～16時30分 名古屋中小企業福祉会館
- 東京都 3月11日(日)10時00分～16時00分 国際ファッションセンター

“満員御礼”が続いています。お早めに申し込みください。

■1型糖尿病(IDDM)お役立ちマニュアルPart5“患者・家族体験編”の内容に関する座談会■

- 東京 1月7日(土)10時00分～12時00分、13時30分～15時30分 (株)ファンドレックス
- 大阪 1月15日(日)10時00分～12時00分、13時30分～15時30分 ネット・カンファレンス大阪

たくさんのリクエストをいただいたこのPart5の作成。患者、家族の皆さんの経験、ご意見をおきかせください!!

事務局長のひとり言

3歳で発症した娘の就職が内定しました。父親と違って?おとなしく、面接では苦戦続き。そんな娘は最後に病気のことをカミングアウトし、自らの経験が難病行政等にいきると言って今年公務員になります。父は日本IDDMネットワークの活動に熱中し、放任状態でしたがその方が良かったかと(笑)

昨年はこれまでに経験したことのないくらい厳しい意見?をいただいた年でした。精神的ショックで1カ月ほど業務がほとんどできませんでした。そんな厳しい状態を救ってくれたのが、患者でも家族でもないエヌワイ企画(佐賀市)の中村社長。無理を言って専務理事をお願いしましたが、理事長の井上さんより年長で正副理事長のよきお目付け役としてご尽力いただきました。

さて、今年はどうな出会いがあるのか楽しみにしています!

発行元 特定非営利活動法人 日本 IDDM ネットワーク

事務局 〒840-0801 佐賀県佐賀市駅前中央1-8-32 iスクエアビル3階 市民活動プラザ内 NO.42

<http://japan-iddm.net/>

相談電話

080-3549-3691 飯田(いいだ)

090-2713-7849 陶山(すやま) 木曜日のみ(第3木曜日は除く)

事務局連絡先

TEL & FAX

0952-20-2062

E-mail

info@japan-iddm.net



特定非営利
活動法人

「治らない」から「治る」へ

日本IDDMネットワーク

1型糖尿病患者の おじいちゃん、 おばあちゃんへ



ゆうこちゃんは、毎日5回、生涯15万回の注射を打ちます。
5歳のゆうこちゃんは、すでに9,000回の注射を打っています。
この子の手には“注射”ではなく“希望”を握らせたい。
この病気を治す“ノーモア注射募金”(1型糖尿病研究基金)
にご協力ください。

日本IDDMネットワークの

3つの 約束

“救う”・・・病気が発症してまもない患者さん、ご家族に、私たちの経験を還元します。

“つなぐ”・・・患者・家族と研究者、医療関係者、企業、行政、そして患者・家族と社会をつなぎます。

“解決”・・・1型糖尿病研究基金で研究者の方々に助成をおこない、1型糖尿病の根治への道を開きます。

1型糖尿病とは…?

- 毎日数回の注射又はポンプによるインスリンの補充を生涯にわたって必要とする病気です。
- 一見、病気のように見えませんが、インスリン注射又はポンプによる注入をしないと数日で死に至る病気です。
- 意識を失うような低血糖や高血糖は死にかかります。
- 原因不明で突然発症し、生活習慣病でも先天性の病気でもありません。
- 日本での年間発症率は10万人あたり1～2人です。

「1型糖尿病」と告知を受けた患者の親の気持ち

祖父母のみなさまへ

「1型糖尿病」と告知を受けた親の気持ち

子どもが1型糖尿病と診断され、「一生インスリン注射をしなければなりません」と主治医から告げられた時、目の前が真っ暗になり「果たしてこの子は生きていくことができるのだろうか」、「主治医のいうことは信じられない。他の子は治らなくても、我が子だけは絶対に治る」と思う親。あるいは事の重大さに気づかず、後になってじわじわと大変な病気になってしまったと嘆く親など受け止め方はいろいろです。

そして、大抵の親御さんは、子どもさん以上に暗い気持ちになり、将来への不安、「どうして我が子だけが病気になってしまったのか。あのときのあれが悪かったからだろうか…」という後悔や、子どもを病気にしてしまったことへの罪悪感を持ちます。親はそのような気持ちでいることを分かってください。

インスリン注射、血糖測定、血糖値のコントロールをすることは重要なことです。特に幼子の場合、親は大変な負担を強いられます。また、思春期以降に発症されたお孫さんは、病気になったことで、物事を投げやりになりがちです。

本来なら、子どもさんを励まし積極的に生きる道を選択できるように導くのが親でしょう。しかし、親自身が暗い将来しか考えることができず、落ち込んでしまう場合が多いのです。そんな親をあたたく見守っていただくために、長い人生経験をお持ちの祖父母の皆様へ「祖父母の心得7か条」をご紹介します。

祖父母の心得7カ条

1

病気の正しい知識を持つ

「親が悪いのではなく、もちろんお孫さんが悪いことをしたからでもなく、誰のせいでもない」のです。1型糖尿病とはどんな病気であるのかを正しく理解しましょう。

2

「かわいそうな孫…」という目で見ない

「かわいそう」と思われることは当然ですが、溺愛することなく、これまで通り接してください。

3

きょうだいのサインを見逃さない

病気になった子どもに手がかかり、他のきょうだいへの愛情が薄くなっている場合があります。そんな時、きょうだいたちは問題行動をおこし「私を見て!」というサインを送りますが、そのサインに気がつかない親が多いようです。どうぞ、親にサインを送っていることを教え、他のきょうだいたちへの声かけをお願いします。

4

自立しようとする子どもの芽を摘まない

子どもが自立しようとする芽を摘んでしまう親がいます。子どもの将来を悲観し、親子で外との接触を絶ってしまう家族があります。溺愛する親、溺愛される子どもの関係は、自立を妨げることを伝えてください。

5

子どもは親のうしろ姿を見て育つ

親の積極的に生きようとする姿勢が、子どもに大きく影響するということを伝えてください。

6

人は苦しみを乗り越える力を持っている

人は病気だけでなく人生において岐路に立たされることが多々あります。しかし人はその時を受け止め、時間はかかりますが、乗り越える力を持っていることを伝えてください。

7

同じ境遇の友達を大切に

同じ病気を持つ仲間との語らいは、子どもにとって何事にも変えられない大きな喜びになることを分かってください。

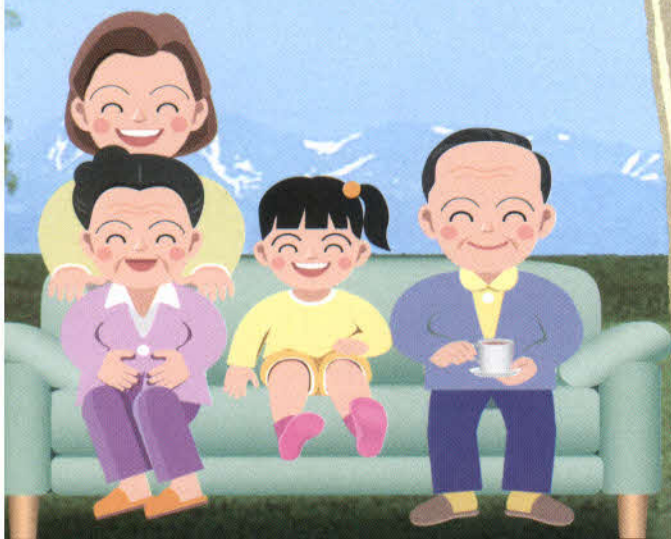
思いやりのある広い心で

「着かず離れず、お節介」をしながら、暖かい眼差しで見守っていただければ、お孫さんの未来は明るくなることでしょう。

1型糖尿病の孫から
おじいちゃん、おばあちゃんへ



どうしてこんなびょうきになるかはわかんないんだって。
そっか、のどがかゆくし、おしっこがいっぱい出てたよ。
でも注射をうてば、いいんだって。
うてるようにがんばるから おかあさんを せめないでね。



一生治らない…
あなたの知らない もうひとつの糖尿病
「1型糖尿病」



阪神タイガース 岩田 稔 投手



エアロビック 大村 詠一 選手

「治らない」から「治る」へ
研究を進めるために
皆さまの寄付をお願いします

1型糖尿病研究基金に
ご協力ください

1万円集まれば……

1型糖尿病を治す基礎実験が5回できます。

100万円集まれば……

新しい治療法の開発が可能になります。

年間1,000万円で……

1型糖尿病根治を目指す研究者を10人応援したい！

1,000万円集まれば……

- ▶3~5年を目処に膵島移植の標準化の確立が可能となります。
- ▶5~10年を目処にバイオ人工膵島移植の臨床応用へ大きく近づきます。
- ▶まだ基礎的な実験段階にあるベータ細胞再生治療の研究が大いに進展する可能性があります。

お振り込み先

みずほ銀行 佐賀支店

普通
預金

口座名義／特定非営利活動法人日本IDDMネットワーク
口座番号／1629393

ゆうちょ銀行

加入者名／特定非営利活動法人日本IDDMネットワーク
口座番号／01710-9-39683

※1型糖尿病を治すために遺贈(遺言による寄付)も承っております。

〒840-0801 佐賀県佐賀市駅前中央1丁目8-32 iスクエアビル3F市民活動プラザ内

TEL・FAX 0952-20-2062



info@japan-iddm.net



http://japan-iddm.net/

日本IDDMネットワーク

検索